

研究論文

幼稚園における食育カリキュラム作成に関する基礎的研究

—幼稚園教諭へのインタビュー調査を通して—

古郡 曜子・山口 宗兼

(2011年12月22日受稿)

抄録： 本研究においては、幼稚園における食育に関するカリキュラム作成を検討するために、幼稚園教諭へのインタビュー調査をおこなった。

結果は次のとおりであった。

「食育」の視点として、「給食での指導」と「好き嫌いの改善」、「野菜の栽培」、「子どもの調理」、「保護者への思い」、「あそびと食欲の関係」が見出された。さらに保護者への働きかけを重視していた。

以上のことから、食育カリキュラムを作成する上では、次の4つを特に意識して計画する必要があると考えられる。

- ①栽培と調理の経験（偏食の改善）
- ②保護者をも含めた食育教育（保護者への働きかけ）の必要性
- ③体を動かす遊びの有効性

I はじめに

平成18（2006）年、「食育推進基本計画の決定」（厚生労働省）における「学校、保育所等における食育の推進」の中で、幼児期における食育の方向性や施策がはじめて示された。さらに平成20（2008）年3月に幼稚園教育要領（文部科学省）ならび保育所保育指針（厚生労働省）が改訂・告示され、「食育」の文言が明記された。

保育所保育指針において食育は「子どもが生活と遊びの中で、意欲を持って食に関わる体験の積み重ね・食べることを楽しみ、楽しみ合う」ことが示されている。また、幼稚園教育要領においては、「望ましい食習慣の形成・食べる喜びや楽しさ・食べ物への興味や関心」が示されている。

このことから、平成18（2006）年頃より今日まで保育者のための食育計画例を記載した書籍が増え、高橋は「食育計画・毎日の食育実践・食育

を学ぼう」と題して、「計画づくり」や「おたより」、「食文化」などについての実践方法と知識など¹⁾を提示している。さらに、子どもの食育に関する実践例などの研究報告として、日本保育学会第61回大会（2008年）では14題、第62回大会（2009年）では16題、第63回大会（2010年）では12題の発表であったが、第64回大会（2011年）では24題の発表と増えている。これらから、幼稚園・保育所・保育者養成校での食育への関心の高まりと必要性がうかがえる。

また、平成23（2011）年には「第2次食育推進基本計画の決定」がなされ、「子どもの食育における保護者、教育関係者等の役割」として「子どもが楽しく食について学ぶことが出来るような取り組みが積極的になされるよう施策を講じる」こと「学校、保育所等における食育の推進」では「子どもへの食育は家庭への良き波及効果をもたらすことが期待できる」と示された。

これは、幼児期における食育の推進を保育所・幼稚園で行なうことで、家庭における食生活の改善に役立つことを期待するものである。幼児の食生活は保護者の食生活と密接につながっており、保護者との協同・連携なしで食育の効果を実現できないと考えられる。

一方、子どもの食生活の現状が保育園児と幼稚園児とで異なることについて次の報告がなされている。木林らは、「非就業者が家庭内に存在する幼稚園では、保護者の子どもに対する細やかな食・生活習慣への配慮やゆとりあるコミュニケーションが窺えた」ことから「幼児期の食・生活習慣の形成には集団保育施設での食育よりも、生活リズムなどの家庭環境や保護者の食意識・態度・保護者とのコミュニケーションなどが大きく影響している」²⁾と報告している。また、岡らは、「幼稚園の食育推進計画とその評価」において「給食の雰囲気になれる、収穫の喜びを味わうなどの体験学習の達成度は高かったが、はし・スプーン・茶碗の正しい持ち方、正しい姿勢などのマナーに関する達成度は低かった」³⁾との報告をしている。

これらのことから、幼稚園においては、保護者自身の食育に関わる取り組みと子どもに与える影響には関連性の大きいことが窺われる。

そこで、本研究では、幼稚園教諭へ「食育」に関するインタビュー調査をおこない、保護者を含めた食育カリキュラム作成の観点を検討することとした。

なお、本研究では園児の家庭における主な養育者を「保護者」とし、インタビュー対象者の園の子どもを「園児」、幼児全体を「子ども」とする。

さらに、「食育」におけるカリキュラム作成での「観点」を「食への興味関心を持たせ、食べることを楽しむ経験をさせて子どもの食生活をよりよいものにする」を目的とした幅広い見方・考え方とする。また、「視点」を「好き嫌いの改善をめざす、共食を楽しませる、食事マナーを身につけさせる」などの具体的・実践的な目標を立てる見方・考え方とする。

Ⅱ 方 法

3人の幼稚園教諭へ半構造化インタビューを行った。質問項目は「①食育のイメージ」と「②これまでの食育の実践」の2つとし、出来るだけ思いつくまま自由に話をしてもらった。

本研究の目的は保護者も含めた内容を含んでいるが、家庭や保護者の話はプライベートな部分も含まれるため、研究者からの質問は避けた。さらに、インタビュー対象者が保護者に対しての何らかの思いがあれば、自ら話すものと想定した。

実施時期は平成23(2011)年3月であった。分析はエピソードを重視して、それぞれの考えを把握した。

Ⅲ 結 果

A教諭は36分間、B教諭は25分間、C教諭は28分間のインタビュー時間であった。表1に3人のプロフィールを示した。

1. 食育と給食

表1に「食育」と「給食」の考えを示した。3人に共通なことは「食べることは大切」であった。

「食育のイメージを教えてください」の質問については、各々次の内容を得られた。A教諭は「食育」以前に子ども達への食への関心をもたせる教育をおこなっていることを話した。それらの実践から「雰囲気作りが大切」だと話していた。さらに、幼稚園教育要領における「食育」の記載によって「記録をして、計画をしっかりと立てるようになった」と話した。食育の参考になる情報が得られやすいことを話していた。

B教諭はまず「食育は難しい」として「大きな危機感を持っていなかった」、「給食が伝わりやすい」と話していた。「食育って何だろうとの答えがほしい」と話していた。

表1 プロフィールと食育・給食の考え

項 目	A 教諭	B 教諭	C 教諭
プロフィール	女性・教員歴 5 年 (保育者養成校講師)	女性・教員歴 10 年	女性・教員歴 22 年 (発達支援教育経験者)
食 育	<ul style="list-style-type: none"> ・食事の雰囲気作りが大事 ・食育以前に全くしていなかった園は少ない ・記録し、計画をしっかりと立てようになった ・調べるための素材の本やアイデアなど業者のもの、他園のホームページを参考 ・人手と知識があまりない園は考え中 ・「食」は子どもにとってすごく大事なこと ↓ 記録・計画	<ul style="list-style-type: none"> ・難しい ・食べることで育つ ・これまで取り組んでいた ・危機感を持ってなかった ・給食が一番伝わりやすい ・食育ってなんだろう、答えが欲しい ↓ 難しい・なんだろう	<ul style="list-style-type: none"> ・食に関わる知識や技能を育てること ・食事は生きていく力を付けていく ・人間として役に立つこと ↓ 知識や技能の育成
給 食	<ul style="list-style-type: none"> ・色々な面から子どもたちにいい環境を作ってあげたい ・その中で「栄養士さんがいてくれて嬉しい」 ↓ 栄養士の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・給食はバランス良い ・お弁当だったら好きなものだけ入れ、お米と冷凍食品でおいしい ・みんなと一緒に食べる、子どもからおいしいと言われるのがうれしい ↓ 栄養バランス 共食の良さ	<ul style="list-style-type: none"> ・給食ってちょっと面倒かなっていう思いもあった。時間制限や、運んできて配ることなど ・食べているものの意味、エネルギーとか具体的な事を知らせる良さがある ・お弁当は好きなものの塊になっている ↓ 具体的な食を知らせる 弁当は好きなものだけ

C教諭は「食育」とは「食に関わる知識や技能を育てること」と明快な話をしていた。「人間として役立つ」という食育と人間の関係性の観点を話していた。

以上、3人の「食育のイメージ」はそれぞれであり、「食育」視点の多様性が見られた。

「食育」の話の発展から出てきた「給食」についてA教諭は「栄養士の存在」の大切さと「給食だより」によって母親の食事への関心を引き出したことを話した。B教諭は「共食」のよさを話し、C教諭は「食べることの具体的なことを知らせることが出来る」ことを話した。また、この2人は「お弁当の中は子どもの好きなものだけ」と話し、保護者の作るお弁当の中身についての様子を話した。

以上のことから3人は給食を食育の場面として捕らえていることが分かった。さらに、保護者の

様子を話していた。

2. 好き嫌い

園児の食べ物の好き嫌いに関する話を表2に示した。2人が「食育」の話から「好き嫌い」に関する内容の話をした。両者とも野菜嫌いに関する内容を話した。

B教諭は「無理はさせない」とし「園児の野菜の残し方」について「味、見た目」について話していた。

C教諭は「栄養的なことの説明をする」、「食べなさいとは言わない」で園児への励ましの言葉がけの援助を話していた。園児の好き嫌い解消へ挑戦する様子や園児同士の励ましの様子を話していた。これらのはたらきかけによって、「食べる量・質・種類が増えた」と話していた。

表2 好き嫌いへの考え

項 目	A 教諭	B 教諭	C 教諭
好き嫌い		<ul style="list-style-type: none"> ・ 偏食が多い ・ 残飯は野菜が多い ・ 味の濃いもの、隠れているカレーのときは食べる ・ ニンジンとか緑の物やゴロンの物はそんなに食べない ・ 見た目で判断している子には小さくして ・ 味も見た目も嫌いな子は食べさせても出しちゃう ・ 無理はさせない <p>↓</p> <p>野菜嫌いのようすと無理はさせない対応</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 野菜嫌いな特に年長の子どもたちには栄養的なことを説明する ・ 「食べなさい」とは言わない ・ 「ちょっと一口だけでも口の中に入れてね。ゴックンできなかったら出しても良いから」からスタート ・ 『一口食べられた』子がいることで「じゃあ、やってみようかな」という気持ちになる ・ 私が声を掛けなかったのに頑張ってみて『先生！食べられたよ！』という子どももいる ・ 今はだいぶ食べられるようになった子は多い ・ 質的にも量的にも種類が増えた ・ 挑戦しようという気持ちは育ってきている ・ それをまわりの子たちもよく見ていて、いつも食べられないのに『頑張った』とか、『食べられたんだって！』と知らせてくれたり、まわりの子たちが励ましてくれたりする <p>↓</p> <p>教諭の栄養の説明と子どもへの声かけ 子ども同士の励まし 食べられるようになってくる</p>

2人は「好き嫌い」に関して憂慮しており、
 長に改善の手立てを試みて園児の変化を見出していることを話していた。

3. 野菜の栽培

園での野菜の栽培に関する話を表3に示した。
 2人が野菜の好き嫌いの解消に効果的である内容を話した。

表3 野菜の栽培への考え

項 目	A 教諭	B 教諭	C 教諭
栽 培	<ul style="list-style-type: none"> ・ ラディッシュちっちゃな種から植えていき、あつという間におっきくなったり、間引きしてあげないととか ・ イモのお花咲いたら畑に見に行き、匂いを嗅いで、「おイモの匂いがする」という子どもがいた ・ 子どもなりに色んな感性 ・ 畑に行ったらでんとう虫とか、虫も見る ・ 五感を全部使える食育っていいなあ ・ 収穫したものの絵は子どもたちが楽しく描く ・ 全部のクラスの先生がやった ・ 子どもが楽しく出来る活動 <p>↓</p> <p>五感を使う食育</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ピーマンとニンジン、カボチャ、トウキビ、ジャガイモ、赤カブ、白カブ、枝豆、タマネギ、花豆、アビオス、ブロッコリーを育てた ・ 私一人でクラスの畑担当、ほかの補助の先生は全体で植えているところを担当 ・ 大変なのは草取り、草ぼうぼうは自分のクラスだけ恥ずかしい ・ 種は出てくるか出てこないかはその年によるし、大抵のものは出てくる ・ 栽培が出来るのは3歳児から ・ 買ってくるものよりは自分で育てて成長の段階を見て、「実った！」っていう喜びを感じられたものの方が食べる ・ 『好きなの採っておいで〜』という小さいのを採ってきて、食べて『これはまだダメだったんだ』という事も分かる ・ 大変ですけど、子どもが食べ物に興味を持つ機会はずごく良い <p>↓</p> <p>教員が大変 子どもが興味を持つ</p>	

A教諭は「給食」の話から「野菜の栽培」に関する話をした。園で栽培をすることで「園児達が五感を使い」、「楽しく出来る活動」であること、栽培に関する知識や技術を知っている職員がいることが実践しやすさとなっていたことを話した。

B教諭は「好き嫌い」の話から「野菜の栽培」に関する話をした。教員が畑の手入れで大変なのは「草取り」とであると話していた。しかし、「園児が食べ物に興味を持つ機会はすごい」として、

園児の様子を「喜びを感じられたものの方が食べる」と話していた。園の教諭たちが畑の管理をしている様子が分かった。

4. 調理

「調理」に関する内容を表4に示した。3人がそれぞれの観点で「調理」について次のように話していた。なお、本研究では園などの集団でおこなうものを「調理」とし、家庭など個人でおこな

表4 調理への考え

項 目	A 教諭	B 教諭	C 教諭
調 理	<ul style="list-style-type: none"> ・料理の子どもたちの反応はとて面白い ・無理に「食べなさい」じゃない ・自分が手をかけたことによって「すごいおいしい」って感じてすごく食べる ・家でお母さんが作ったら、食べない子が絶対出る ・一時期 0157 が怖くて、静かになっちゃった ・衛生面は気をつけようとは思っている ・全部のクラスの先生がやった ・先生も子どももすごく楽しく出来る活動 ・準備は先生が子ども達が喜ぶから一致団結して <p>↓</p> <p>嫌いなものでも食べる 子どもの反応がいい 先生も子どもも楽しい</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもは楽しそうに食べる ・ほかの子が食べているのを遠くからイヤな顔して見ている子も「食べる？」と聞くとは以外と「食べる」って食べる ・調理は茹でる、炒めるとか生でそのままマヨネーズつけて食べる ・キュウリとか生で食べられるものは探ってスグに洗ってハイって ・子どもが食べ物に興味を持つ機会は良い <p>↓</p> <p>嫌いなものでも食べる 子どもは楽しい 簡単な調理</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・年長は道具を使ったり、手で簡単に丸められるような白玉団子からはじめる ・子どもたちが見ている前で調理する ・匂いとか湯気とか、熱いから側に寄っちゃいけないとか、基本的なことを経験させる ・「お弁当の用意しなさい」と言ったら「先生はこれ炒めてみんなにごちそうするから」と、3クラスとも同じようにやって盛り上がった ・普段は食べたことがないような子が手を出した ・『お芋の匂いがする』とか『ぶくぶく泡が立っているよ!』、『先生、すごい煙が出ています』と言って、お部屋がお芋の香りで満たされて、見ている子もいるしコトコト折紙をしている子やお絵描きをしている子もいて、粉ふき芋に見せて、昔の家庭にならあったらう... という風景を保育室に展開して、すごく楽しい ・素朴なことしかできないけれど、素材の味がわかり、子どもたちがおいしいと感じられる ・料理の保育は良いと思う ・最低のところだけはこどもに経験させたい <p>↓</p> <p>教諭が簡単な調理・基本的な調理を見せる</p>

うものを「料理」とする。

A教諭は「子どもの調理」について「先生も園児もすごく楽しく出来る活動」として、「園児の反応がいい」と話していた。

B教諭は「子どもの簡単な調理」について「園児が楽しそうに食べる」様子を話し「園児が食べ物に興味を持つ機会は良い」と話していた。

C教諭は「教師が簡単で、基本的な調理を見せる」様子と「最低のところを経験させたい」を話した。「昔の家庭であつたらうな」ということを「保

育室で展開する」様子を話した。さらに、園児の反応を細かく話し「すごく楽しい」様子を話した。

3人は、「子どもの調理」を好き嫌いの改善や楽しい場面として、効果のある食育実践として話していた。

5. 遊び

C教諭が「食欲」と「遊び」の関係を話した内容を表5に示した。

「好き嫌い解消」の話からの発展として「いっば

表5 食欲と遊びの考え

項 目	A 教諭	B 教諭	C 教諭
あそび		<ul style="list-style-type: none"> ・ いっぱい遊んだときは絶対遊び食べはしない ・ 体を動かしていっぱい疲れてお腹ぺこぺこという状態になると食べる ・ 今の子どもたちは家の中で遊ぶことが多い。お腹が空いてもないのにゴハンってなったときに、一生懸命遊んできた子とは差がある ・ 体を使って遊んで帰って来て『ただいま！ ごはんは？ みたいな。そういうの、今は減っているのかな…』 <p style="text-align: center;">↓</p> <p>食欲とあそびが関係する</p>	

い遊んだときは遊び食べをしない」、「一生懸命遊んだ園児とそうでない園児の食欲に差がある」ことを話していた。

6. 保護者

3人の「保護者」への考えを表6に示した。
A教諭は「食育」の一環として保護者に「子ど

もの料理」に関するビデオ視聴を行ったときの様子を話した。家庭での親子料理への発展などの効果を話した。

B教諭は、園児の「好き嫌い」に関する話から、保護者の影響を話した。園の教諭が子どもの好き嫌いの解消に努めても「保護者が一生懸命やらないと辛いのかな」と話し、「最終的には保護者の

表6 保護者への考え

項 目	A 教諭	B 教諭	C 教諭
保護者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 役員会議の時に、『食育』の子どもがクッキングのビデオを見た ・ 『そのビデオ見て良かった』『ちっちゃい頃から足手まといになってもお手伝いをした方がいい』『邪魔になっても一緒に手伝わせていたら、大きくなってきたら結構自分でやってくれるようになって』の話を聞いた ・ 調理を一緒にすることで『お母さん助かる』との話を聞いた ・ 『お母さん手出をささないで私がやるから、と子どもが言った』との話を聞いた ・ 給食だよりの料理方法や栄養のことでお母さんが「作りましたよ」言ってくれる <p style="text-align: center;">↓</p> <p>子どもクッキングビデオ視聴の効果 給食だよりの効果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 『私が嫌いなので食べさせていないんです』という保護者の方は多い ・ 2つのパターン…「私が嫌いだから子どもも嫌い」と「私は嫌いだけど実は食べた」 ・ お弁当だったら好きなものしか入れないとか、お米と冷凍食品で済みという時代 ・ 保護者の方が一生懸命やらないと辛いのかな～と思う ・ 最終的には保護者の方に食べることを気にしてもらってことです <p style="text-align: center;">↓</p> <p>子どもの好き嫌いは保護者の影響も 保護者に分かってほしい</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 好き嫌いの解消が保護者はなかなかできない ・ 子どもは、『また言われた』とか、親も『またどうせ食べないだろう』と思っている ・ お母さんたちは押し付けでも、おだてるなどはなかなか上手にできない ・ お母さんたちはそこまで深刻じゃないのかもしれない ・ 幼稚園が肩代わりするっていう気持ちはある ・ 言葉かけについて、環境としての幼稚園ですごく顕著に見られる ・ 幼稚園で食べられるようになったことで、家でも食べられるようになった報告は受ける ・ 『私のレパートリーが貧しい、いろいろと勉強します』と言ったお母さんがいた ・ お母さんたちのチャレンジ心の育ちを期待 ・ こどもの食生活は家庭での差が大きい ・ お母さんたちに知らせていくのは大事 ・ 卒園までの経験プラス家での場が必要 <p style="text-align: center;">↓</p> <p>保護者はなかなか出来ない 幼稚園から波及効果への期待</p>

方に食べることを気にしてもらうこと」と話していた。

C教諭は、園児の「好き嫌い」に関しての話から、解消を「保護者はなかなかできない」とし、保護者が「深刻じゃない」、「幼稚園が（保護者の）肩代わり」と話した。「園児の食生活は家庭での差が大きい」と話していた。「お母さん達に知らせていくことは大事」と話していた。「卒園までの（園での）経験プラス家での場が必要」と話した。

3人は、「食育」に関して園児の保護者への働きかけを重視した話をしていた。

IV 考 察

1. 4つの食育実践

本研究から4つの食育に関する視点が見出された。

(1) 給食

子ども達にバランスの良い食事例としての給食を「食育」の一環とすることは従来からおこなわれている。保育所では「給食」を通して行われることが最も直接的で有効とされる。一方、幼稚園では給食が義務付けられていないことから、積極的に教育計画として「給食」を取り入れていくことが明言されていない。

今村は、幼稚園教諭の給食中の発話内容の検討を行い、「幼稚園教諭の食事中的コミュニケーションとして、摂食促し発話が約40%、日常会話発話が約19%、マナー指導発話は約18%であり、栄養指導的な発話は約2%」⁴⁾と報告している。

本研究の結果においても、給食を実施している園での「給食」を用いた「食育」実践をしていることが分かった。平成22年度の北海道での公立・私立幼稚園における完全給食実施状況は32.7%（北海道教育庁学校教育局）である。今後、「幼稚園」での「給食」を用いた「食育」についてのありかたも検討すべきである。

(2) 好き嫌いの改善

原らは女子大学生の幼児期と現在における食品

の好き嫌いの変化に関する調査において、「幼児期の好き嫌いは大学生になっても大きく変化しなかった」⁵⁾と報告している。

近藤らは幼稚園児の保護者を通じた食生活調査を行い、『何でも食べる』が25%、『少しある』『ある』が73%であった。嫌いな食べ物が野菜やきのこ、牛乳が高率であった。保護者の約10割が食育を幼児期に始めるべきだ、と回答していた⁶⁾の報告をしている。

横山らは幼稚園児の母親への意識調査において「9割以上の子どもに嫌いな食べ物があり、母親自身もそれを悩みと捉えていた。しかし、深刻な悩みにはいたっていないようであり、積極的な対処法はとられていなかった」⁷⁾と報告している。さらに、同報告では「母親の園に期待する食育の実践としては、野菜の栽培が揚げられた」⁷⁾と述べている。

本研究対象の3名の教諭はこれらの報告と同様に、子どもの好き嫌いの解消のために保護者をも含めた「食育」の視点を持ち、実践をしていることが分かった。

(3) 栽培・調理の実施

幼稚園における栽培・調理の実践報告⁸⁾に「園児と保護者のサツマイモ栽培、収穫、調理の結果、園児らの食に対する興味関心が高まり、保護者が食に対して日常的に注意を払うようになるなどの変化が見られた」と示されている。

本研究対象者は、栽培・調理に対する園児の反応を良いものとして評価しており、「食育」の目的である「楽しい体験」と「好き嫌いの改善」に役立つものとして捉えていた。

ただし、栽培や調理は場所の確保や専門的な知識や技術が必要な場合があり、教師だけでは対応しきれない場合が考えられ、教師の意欲だけでは実施や継続が難しくなると思われる。さらに、準備と後片付けに時間と手間が必要であり、栽培や調理の担当者確保も課題となると思われる。

(4) 遊び

食事への関心を持たせることを目的とした遊び

を積極的に取り入れたい。その中で栄養や食品の知識を持たせることも重要である。さらに、運動遊びを多く取り入れることで、子どもの食欲が増しておいしい食事を体験させることが出来る。

西村らは「養育行動と食育の関連の調査において、母親が運動遊びをする子どもほど食欲があるという結果であった」⁹⁾と報告している。このことは、幼稚園での「食育」の視点として、保護者に対する運動遊びの大切さをも伝える必要があることを示している。

いずれも、幼稚園教諭のみの「食育」では子どもの食生活の改善にはすぐに結びつかない。したがって、保護者への働きかけが不可欠である。

2. 保護者対象の「食育」

鈴木は幼稚園と保育所の保育者へのグループ・インタビューを行い「食育をすすめる上で、保護者の考えや食生活が障害の一つとなっていること、保育者が直接働きかけることは難しいと感じていることが確認できた。保護者への食に関するお便りの発行や講演会では、態度や食行動の変容に結びつくことは多くない。子どもへの食育内容については五感を使った実体験のほうが感動・変化しやすく、保護者が子どもの変化を捉えやすい。子どもと保護者の共感も生じやすい。」¹⁰⁾と報告している。

名村らは、「収穫した野菜のクッキングによる食育効果と保護者の意識、園児の食関心との関連に関する調査」により「野菜や果物の栽培・収穫・収穫した野菜を使用したクッキングの食育プログラムを幼稚園で推進したところ、野菜嫌いが低下し、家庭での食事への手伝い・食事への関心・栄養に関する知識については有意差が認められた」¹¹⁾との報告をしている。

これらの報告から、子どもだけへの「食育」では効果が得られにくく、保護者をも含めた「食育」が必要であることが分かる。本研究対象者の3人はこれらの報告と同様の実感を持って「食育」を考えていることが分かった。

したがって、先に述べた食育実践の4つの視点を踏まえ「好き嫌いの改善」を目的として、「給食」を活用し「栽培・調理」を実施して「あそびによって食欲をうながすこと」を取り入れた保護者への働きかけが有効であることが推察される。

3. 幼稚園教育におけるカリキュラム作成

(1) 幼稚園・保育所におけるカリキュラムとは

保育は、子どもの日々の生活を、安定した情緒の下で発展させ、望ましい発達の援助をするものである。そのためにも、幼稚園や保育所において、あらかじめ計画を立案し、それに基づいて保育を展開することは、きわめて重要とされている。こうした計画がカリキュラム (curriculum) であり、幼稚園においては教育課程、保育所においては保育課程といわれている。

幼稚園・保育所におけるカリキュラムとは、子どもが幼稚園・保育所における保育者の援助のもとに、目標を目指して進んでいく走路とかコース、すなわち幼稚園・保育所における活動経験の系列を意味する。言い換えれば、教育 (保育) 課程とは、教育 (保育) 目標を達成するために、その目標に照らして、子どもが幼稚園・保育所で活動する内容を取捨選択し、整理して編成した、全体的な教育 (保育) 計画であるといっていよい。

(2) カリキュラムの特徴

カリキュラムを典型的な2つの傾向に大別すると、教科カリキュラムと経験カリキュラムに分けることができる。

教科カリキュラムは、子どもに必要と思われる一定の知識・技術を、園という集団の場を通して、系統的・効率的に伝達していくことを目的としたカリキュラムである。したがって、保育者の主導性のもとに、文字や数、基本的知識などを一定の系統性で整理し、教え込もうとすることなどが多くなる。これに対して、経験カリキュラムは子どもの直接的な経験、具体的な生活から出発したものである。どのようにして子ども自身の興味・関心に基づいて、有意義かつ自発的な経験をさせる

かということを目的としたカリキュラムである。

1989（平成元）年、幼稚園教育要領は四半世紀ぶり改訂・告示され（保育所保育指針は1990年）、遊びを中心に環境を通して行う教育であることを前面に打ち出し、領域も改め5領域とし、小学校の教科とは異なることを明確に示した。それは、知的学习を中心に据えた保育、知能や技術的能力を早期に開発しようとする保育、能力主義教育観（知的・技術的能力至上主義）に基づいた保育等への反省に基づくものであった。ちなみに、1989（平成元）年に告示された幼稚園教育要領以降、若干の改訂は行われてはいるが、幼稚園教育要領・保育所保育指針は、経験カリキュラムのスタンスに基づいているといえる。

しかしながら、幼稚園教育におけるカリキュラムのスタンスはその時代背景等によって、振り子のごとく、行きつ、戻りつを繰り返していることも理解しておく必要がある。

（3）保育の計画の必要性

近年、代々続く有名な老舗日本料理店が廃業に陥った。その原因は利益優先で緩慢かつ、ずさんな料理を提供したことによるものであった。

山田敏はかつて、保育の目的・内容・方法等を料理に例えたが、料理と保育は酷似している。料理店における目的は本来、いかに楽しめてたくさんのお金を得るかよりも、いかに汗をかいてお客さんの満足を得るかにある。保育も同様である。保育の計画は料理でいうならば、いわゆるレシピである。

料理人は何の計画も無く、行き当たりばったりで料理を作っているわけではない。素材の厳選から始まり、焼くか煮るか蒸すか、味付けはどうか、調理器具は？複数の料理人がいる場合、それぞれの役割分担は？段取りは？。保育も同様である。無責任な料理を提供することによって、客を死に至らしめることがある。保育も同様である。

保育の計画は保育者の意図を子どもに押し付け、子どもの主体性が損なわれるとの見方も無くはない。しかしながら、保育者はむしろ、子ども

が主体性を十分発揮できる発展的な計画を作成する責任があるのである。子どもの主体性を尊重する保育とは、子どものやりたい放題をすべて認める保育ではない。したがって、子どもの主体性の尊重と計画性のある保育は、矛盾するものではない。

以上、述べてきたことを踏まえて、保育の計画の必要性をまとめると以下ようになる。

- ①保育者が園の保育目標や保育方法等について共通理解を図り、子どもの興味や関心に即した保育を展開するため。
- ②子どもの発達の実態を捉えどのような経験を促すべきかを検討し、子どもが主体的に取り組む保育内容を構築するため。
- ③保育者の得意な活動に偏ることなく、調和のとれた保育内容を選択し、適切な保育活動を展開するため。
- ④保育の混乱・行き詰まり・不慮の事故を防ぐために、保育者が見通しをもって準備を整え、発展的に保育を進めるため。
- ⑤保育者が、実践した保育を反省したり、評価したり、また他の人から批評してもらう際の資料として活用し、自らの保育の改善を図るため。

計画を立てることは手間のかかることである。だが、愛する子どもの喜びに満ちあふれた姿を予想し、計画を立案し、その結果、効果的に子どもの健全かつ総合的な成長が促されたならば、それは保育者としての喜びであり、やりがいであり、明日への活力となる。したがって、園の責任者は、保育者が心のこもった保育を計画するための余裕（精神的余裕・身体的余裕等）が十分確保される職場環境を提供できるよう配慮する必要がある。

そして「食育」についてであるが、幼稚園教育要領においては領域「健康」で言及されている。保育所保育指針においては、第5章「健康及び安全」の3に「食育の推進」が盛り込まれただけではなく、第3章の「保育の内容」にも食育に関する事項が含まれていることなどから、食育の観点を記載し、さまざまな領域と関連をもって展開さ

れるよう配慮することが必要である。¹²⁾

(4) 「食育」と5領域の関係図

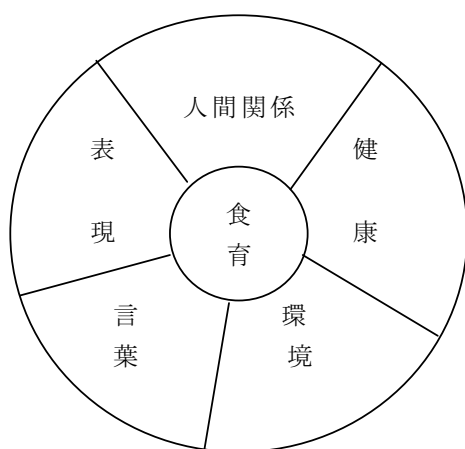


図1 「食育」を中心に5領域を経験カリキュラム的に捉えてみる

図1は、中心統合法的なものであるともいえる。

多少、具体的に解説するならば、

人間関係…

“先生や友達と仲良くおいしく昼食を食べる”

“お弁当を通して保護者との信頼関係を深める”

→食育

健康…

“身体を十分に動かす” →食育

環境…

“大地の恵みに感謝する” “栽培・調理を行う”

→食育

言葉…

“昼食時に先生や友達と言葉でやりとりをする”

→食育

表現…

“食に関わる表現活動を行う” →食育

と考えることができる。

4. 「保護者を含めた食育カリキュラム」の作成の観点

本研究の結果として、幼稚園教諭の経験から「食育カリキュラム」の基礎的方向性を見出すことが出来た。

さらに、筆者らは前述した「幼稚園教育におけるカリキュラム作成」の観点をふまえた、「食育」

に関する計画的な「保護者を含めた食育カリキュラム」作成の必要性があると考ええる。

具体的には、参観のみの保護者を保育・教育の場にどのように取り込むのかを考える必要がある。

家庭の食生活は、個人的なものであるため状況の把握は難しい。しかし、子どもの様子や保護者会などの会話を通して「食に関する保護者の思いや行動」の把握を心がけることで、子どもに関わる食生活の課題を知ることが出来る。本研究で得られた「好き嫌いの改善」もその一つである。

幼稚園教諭が園児や保護者の様子を把握し、食生活の問題点を見出すことで「保護者を含めた食育カリキュラム」の課題設定を行い、その解決に向けた計画を設定する。特に、子どもの遊びと食育の関連性は重要である。

古郡は先行研究において「教育指導的視点のみの一斉指導的な食育は、発達の視点から有効とは言えない、むしろあそびを取り入れた食育のほうが興味関心をもたせて学びへとつなげることが示唆された」¹³⁾の結果を得ている。遊びには積極的な保護者参加も求めたい。

また、堀田らは、幼稚園児と育児担当者（本論では保護者）に対する「食育だより」を活用した食育の効果として「園児に対するチェック表（『おてつだいできたかな！』として『りょうりをはこぶ』などの項目にチェックする表）を加えた食育だよりは、情報提供と行動変容の双方の利点を持っており、食行動の改善につながる効果を有することが示唆された」¹⁴⁾と報告している。

この報告での「給食だより」は情報提供だけではなく、親子の参加をうながす方法を用いている。このように、保護者が来園をしなくとも、自宅で幼稚園からの働きかけによって「食育」がおこなわれ、有効に機能していることがわかる。

いずれにしても、保護者と子どもが意欲・関心をもって参加できるカリキュラム作成を求めたい。

V まとめ

本研究では幼稚園における食育実施を計画する上で、保護者への配慮を含めたカリキュラム作成のための視点を検討するために、3名の幼稚園教諭へ「食育」に関するインタビュー調査をおこなった。

インタビューからは、「給食での指導」と「好き嫌いの改善」、「野菜の栽培」、「子どもの調理」、「保護者への思い」、「食欲と遊びの関係」の食育視点が見出された。また、「食育」に関して園児の保護者への働きかけを重視した話をしていた。

食育カリキュラム作成においては、子どもだけへの「食育」だけでは効果が得られにくく、保護者をも含めた「食育」が必要であり、好き嫌いの改善を目的として、栽培と調理を実施して、体を動かす遊びと「食育」を取り入れた保護者への働きかけが有効であることがあらためて窺われた。

家庭の食生活は個人的なものであるため状況の把握は難しいと思われる。しかし、子どもや保護者会などの会話を通して「食に関する保護者の思いや行動」の把握を心がけ、知ることが出来る。

これからの課題として、保護者をも含めた「食育カリキュラム」を計画し実施した場合の課題の想定や、幼稚園での環境設定などの具体的な計画・実施に向けた検討が必要である。

文 献

- 高橋美保：保育者のための食育サポートブック。大阪、ひかりのくに、2010.
- 木林悦子、上野恭裕、西谷香苗：幼稚園・保育所における園児の食・生活習慣についての比較研究。園田学園女子大学論文集43：85、2009.
- 岡智代、福元芳子、久野一恵、久野健夫：幼稚園における食育推進計画とその評価。佐賀大学文化教育学部研究論文集 15（1）：1、2010.
- 今村光章：給食時における幼稚園教諭の発話分析。岐阜大学教育学部研究報告教育実践研究10：133、2008
- 原正美、山本実里、神保忍、星野由花、宮本侑紀、古川漸：女子大学生の幼児期と現在における食品の好き嫌いの変化。日本食育学会誌5（4）：214、2011.
- 近藤みゆき、日比野久美子、三田弘子、宮澤節子：幼稚園児の食生活調査。名古屋文理大学紀要11：142、2011.
- 横山真貴子、池田有希：幼稚園における「食育」の可能性を探る－母親の意識調査からの一考察－。奈良教育大学紀要53（1）：71、2004.
- 桑畑美沙子、宮瀬美津子、田口浩継、石川由里子、隅田博美：異年齢集団尾コラボレーションによる食育システムの構築（1）幼児に焦点をあてた食育実践の取り組み。熊本大学教育実践研究24：130、2007.
- 西村美津子、須見登志子：幼稚園児の給食に対する食欲への影響要因についてⅡ～父親の養育行動との関連～。山陽学園短期大学紀要36：20、2005.
- 鈴木秀子：子どもから家庭へつなぐ食育－保護者の「学び」からの検討。会津大学短期大学部研究年報67：17、2010.
- 名村靖子、奥田豊子：収穫した野菜のクッキングによる食育効果と保護者の意識、園児の食関心との関連。大阪教育大学紀要第Ⅱ部門58（1）：38、2009.
- 細井房明・野口伐名・大桃伸一共編：保育の理論と実践（第9章：山口宗兼執筆）、学術図書出版社、2010
- 古郡曜子：幼稚園と保育所の食育計画－幼児期のあそびをとおして－、北海道文教大学研究紀要35：7、2011.
- 堀田千津子、木村友子、内藤通孝：幼稚園児と育児担当者 に対する「食育だより」を活用した食育の効果。日本食育学会3（4）：344、2010.

A Fundamental Study on the Formulation of the Food Education Curriculum in Kindergartens

— Based on Interviews Conducted with Kindergarten Teachers —

FURUGORI Yoko and YAMAGUCHI Munekane

Abstract: This research was carried out by conducting interviews with kindergarten teachers in order to examine the formulation of the curriculum regarding food education. There were six common factors that were identified through this process as being beneficial to the development of food education. ‘Guidance for kindergarten lunchtime’, ‘encouraging a more balanced diet by preparing and presenting unpopular foods in different and appealing ways’, ‘involving the children in the growing of vegetables’, ‘involving the children in food preparation’, ‘outreach to parents’, and ‘being aware of the relationship between appetite and play’.

In light of these findings, the following four points should be considered when formulating a food education curriculum.

1. Providing experience of growing vegetables and preparing food (encouraging a balanced diet)
2. The need to involve parents in food education (outreach to parents)
3. The importance of physically active play